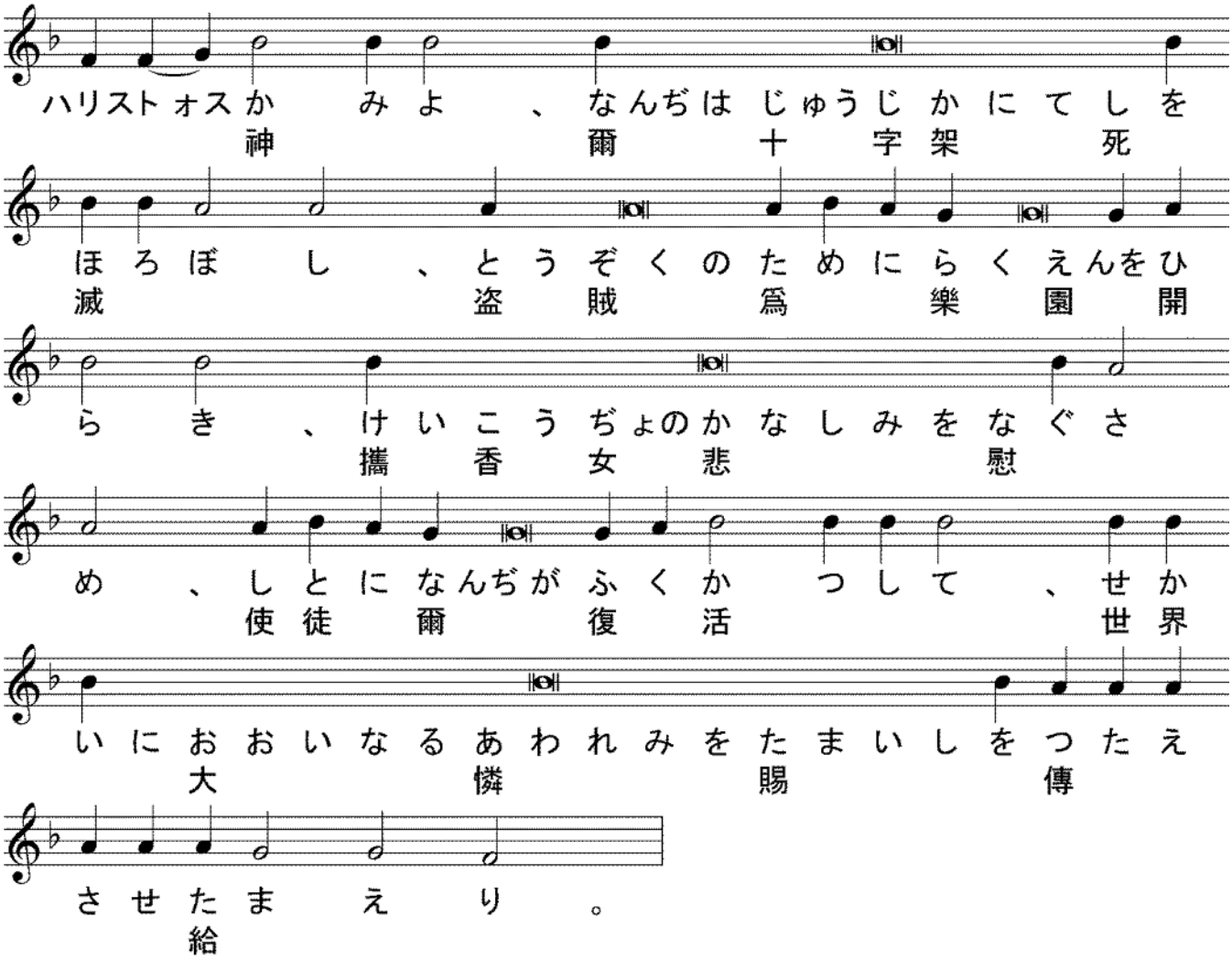
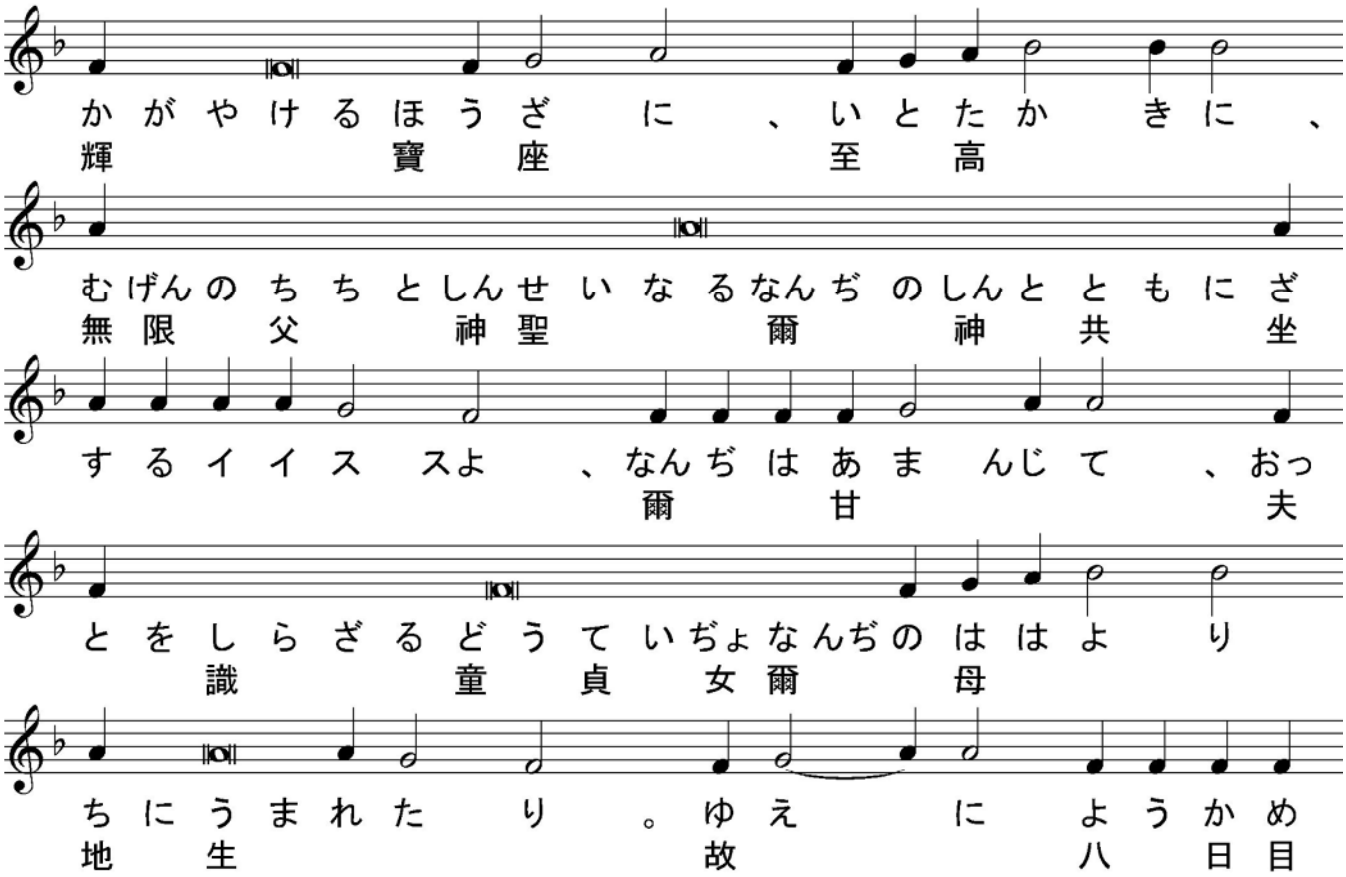
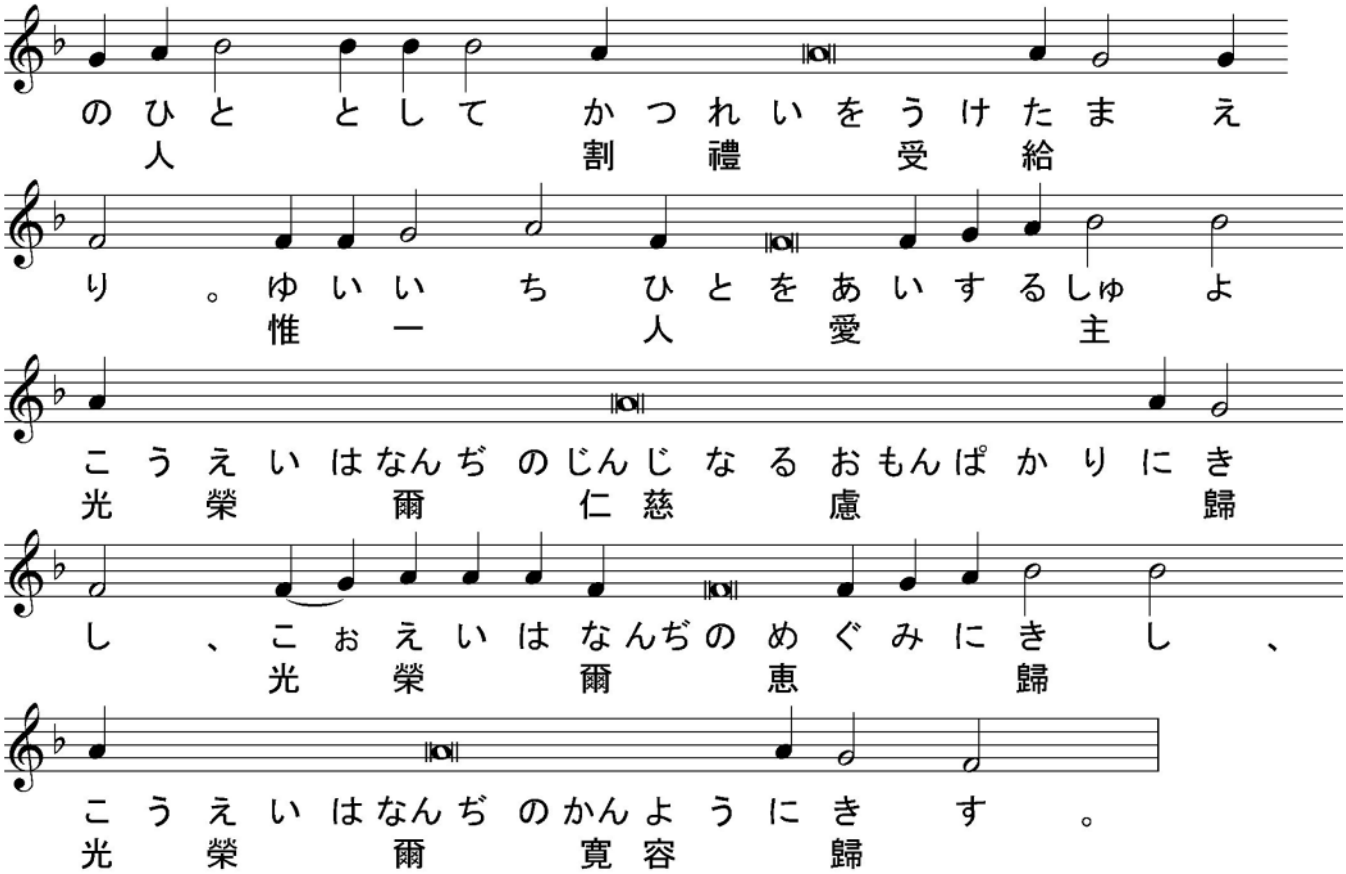
【　復活のトロパリ　第７調　】

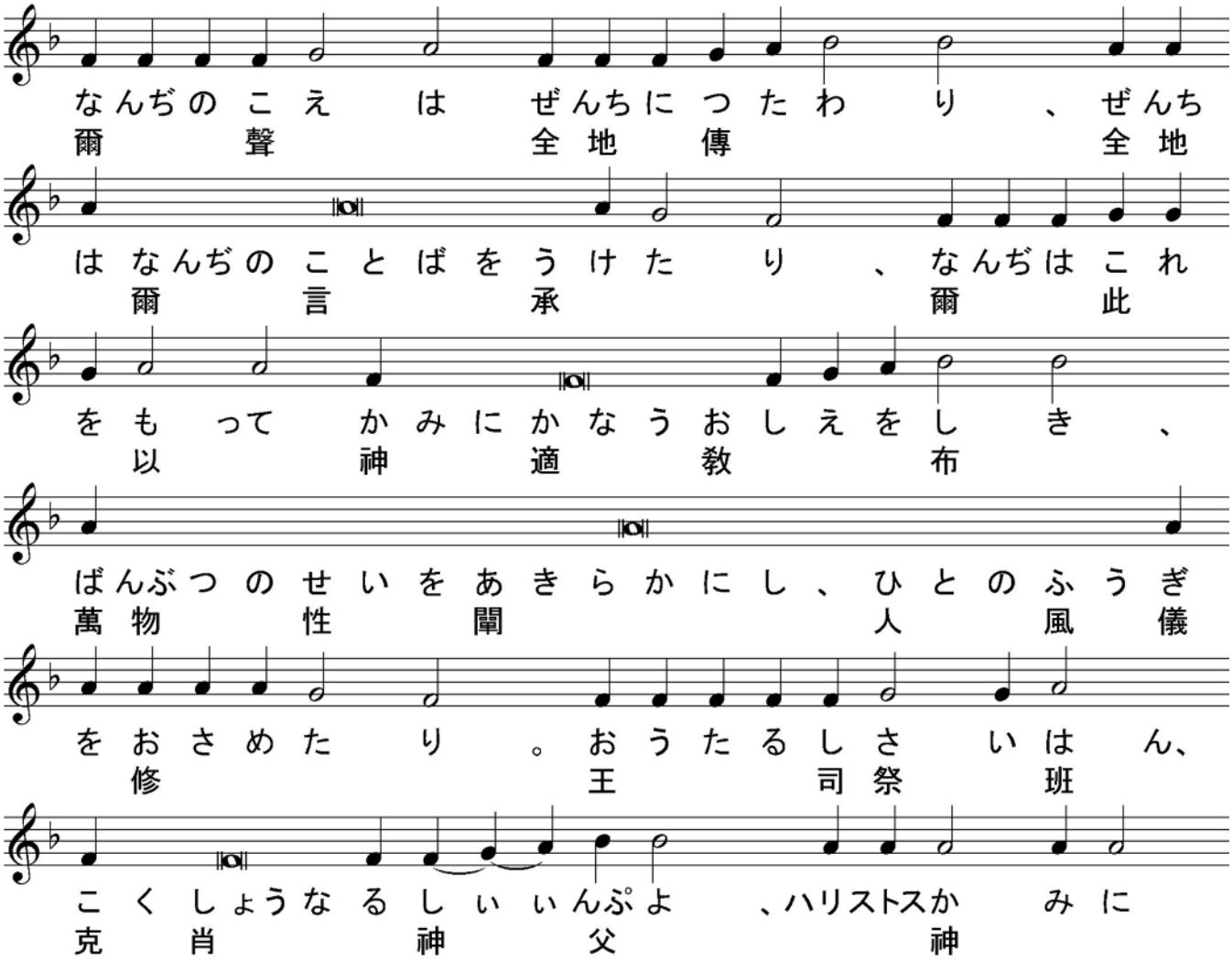


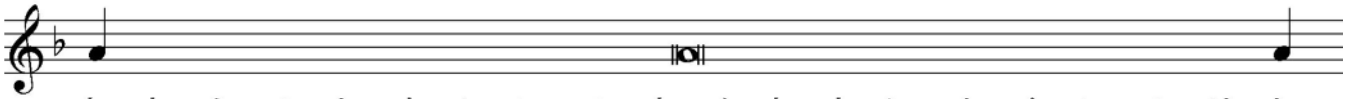
【　主の割礼祭のトロパリ　第１調　】

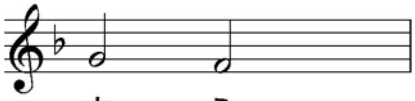




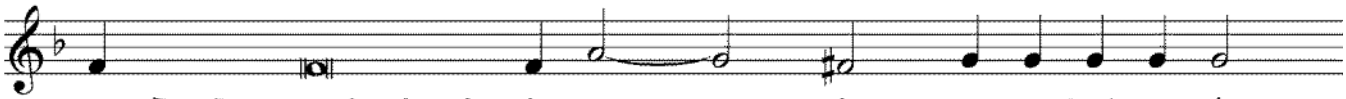
【　聖大ヴァシリイ祭のトロパリ　第１調　】

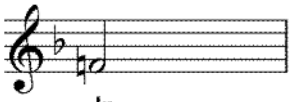


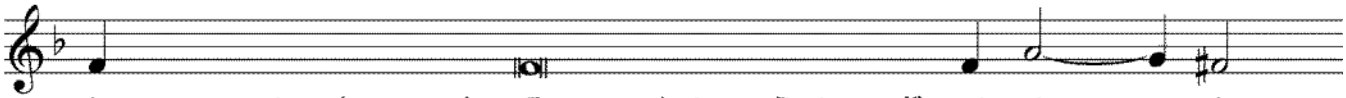


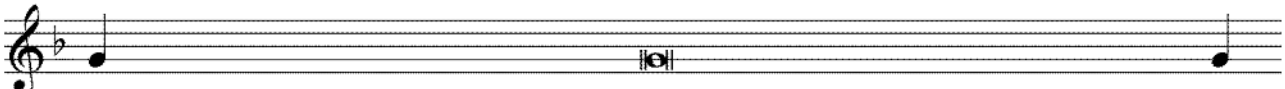


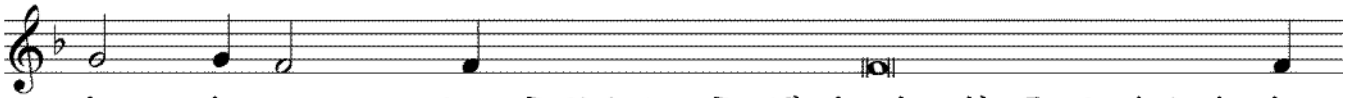
【　聖大ヴァシリイ祭のコンダク　第４調　】

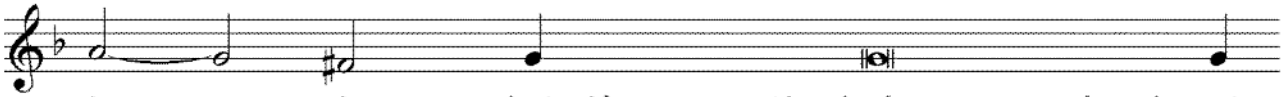


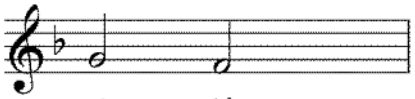




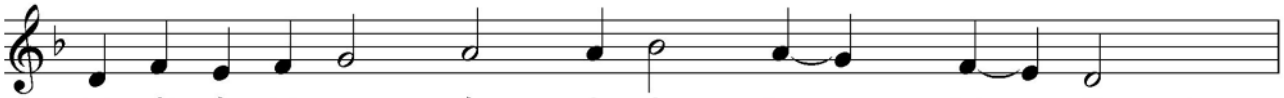


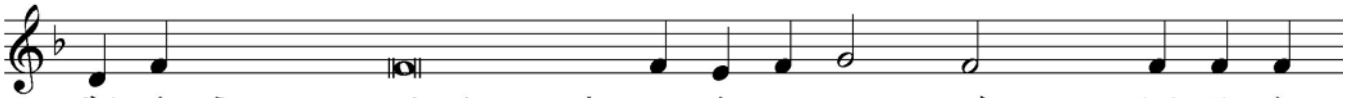


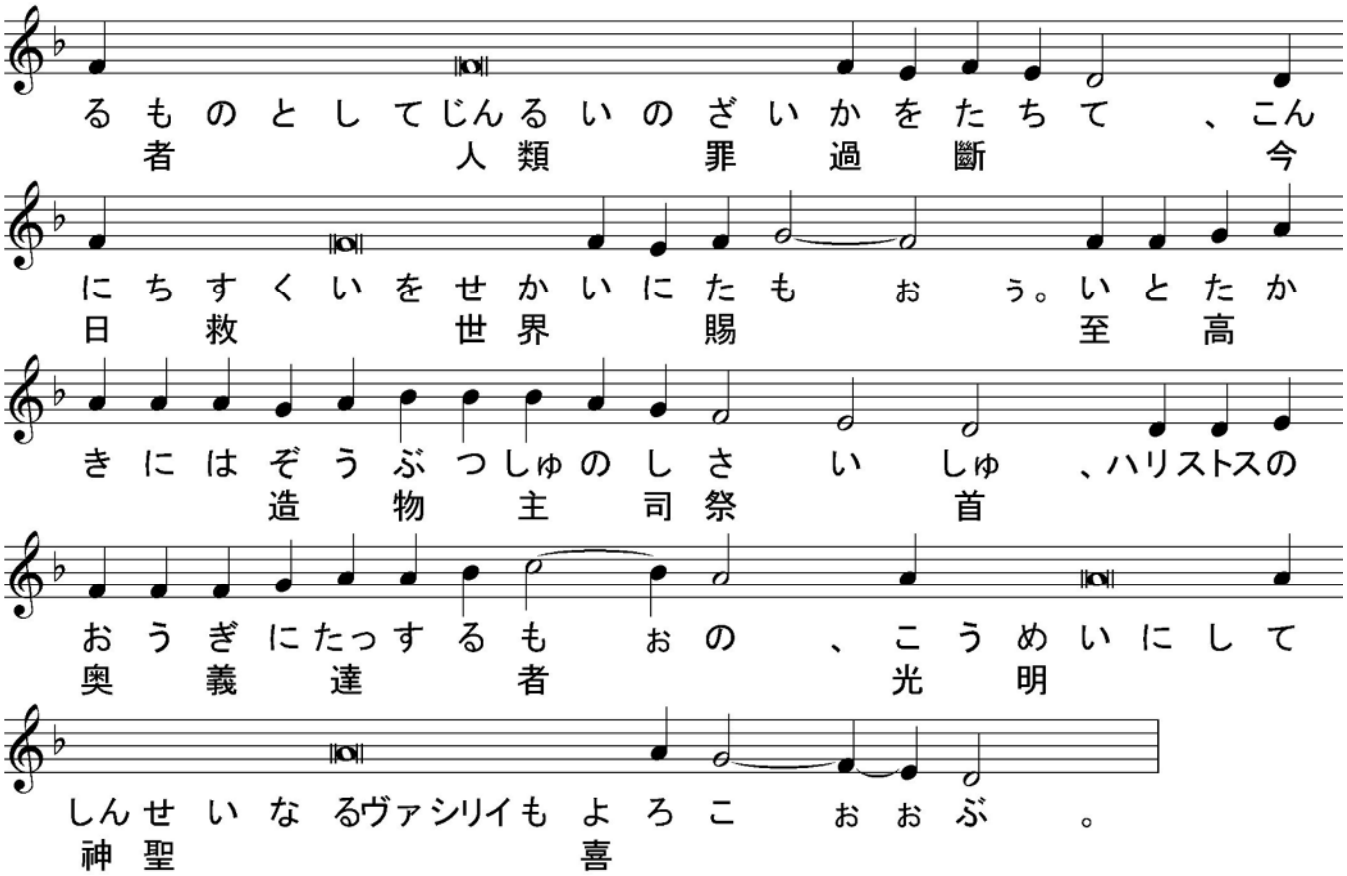




【　主の割礼祭のコンダク　第３調　】

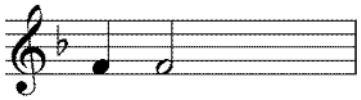




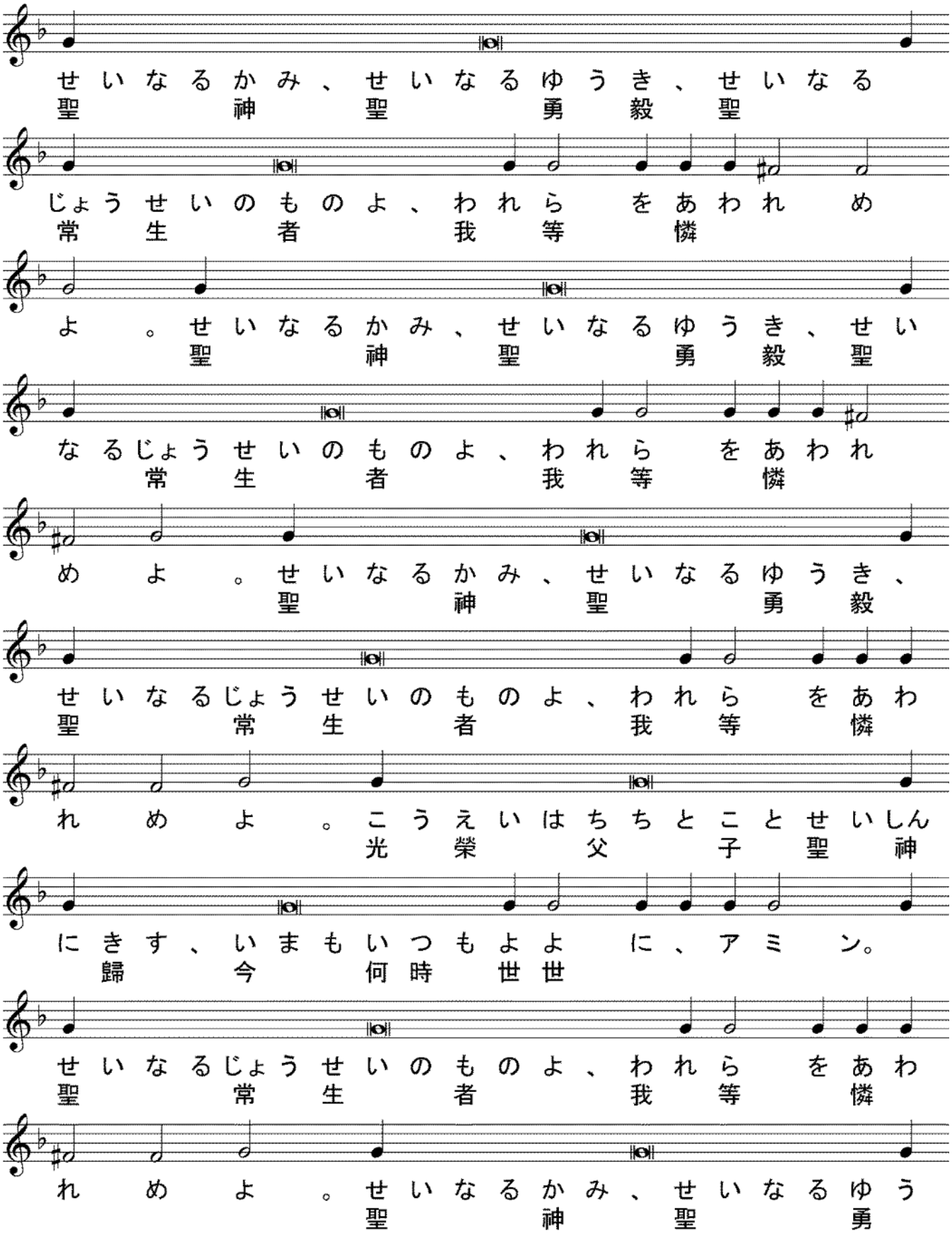


司祭)（ 默誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 ）

司祭) **蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、**


ア ミ ン。

【 聖三祝文 】


せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖
じょうせいのものよ、われら をあわれ め
常 生 者 我 等 憐
よ 。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖
なるじょうせいのものよ、われら をあわれ
常 生 者 我 等 憐
め よ 。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅
せいなるじょうせいのものよ、われら をあわ
聖 常 生 者 我 等 憐
れ め よ 。こうえいはちちとことせいしん
光 榮 父 子 聖 神
にきす、いまもいつもよよ に、アミ ン。
歸 今 何 時 世 世
せいなるじょうせいのものよ、われら をあわ
聖 常 生 者 我 等 憐
れ め よ 。せいなるかみ、せいなるゆう
聖 神 聖 勇

司祭）（　黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、　）

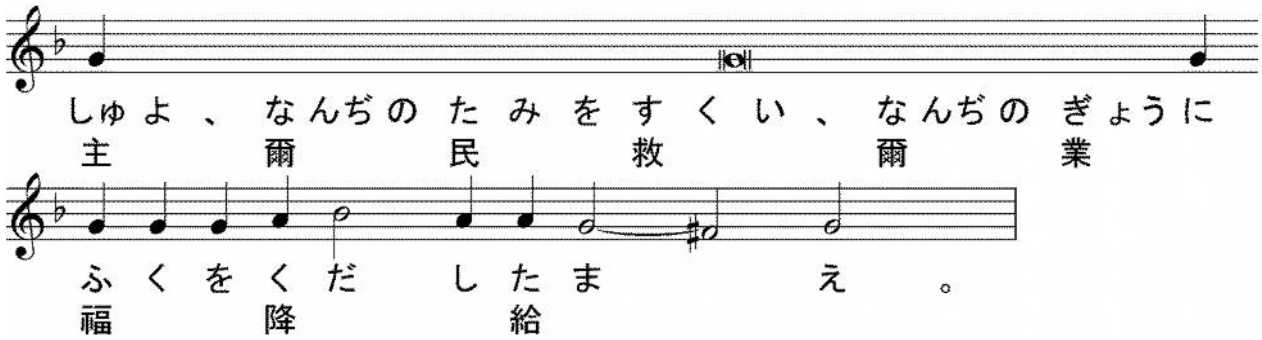
【　提綱　洗礼祭前の主日　第６調　及び　成聖者の　第１調　】

司祭）慎みて聽くべし、衆人に平安、

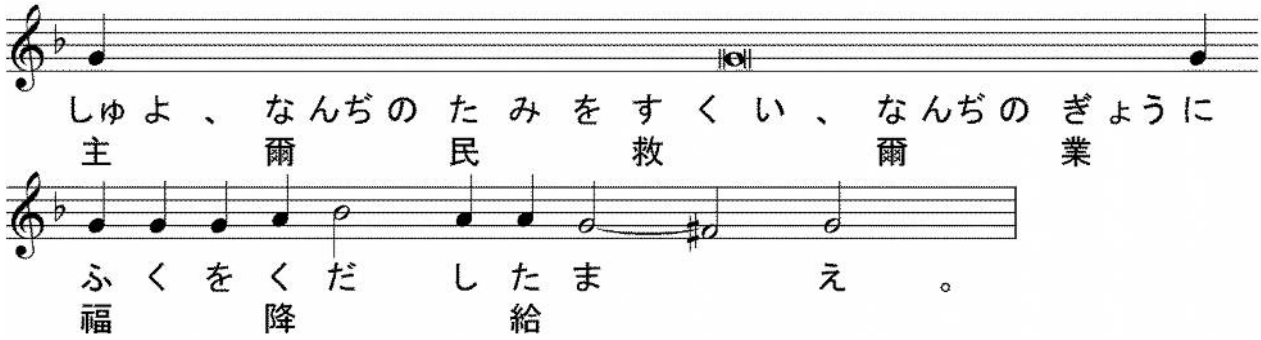
誦經）爾の神にも、

司祭）睿智、

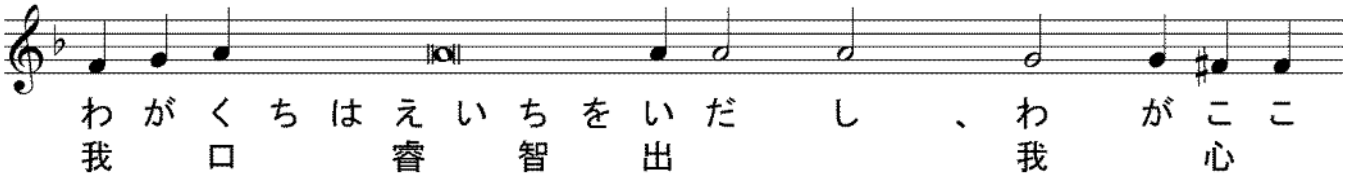
誦經）プロキメン、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、

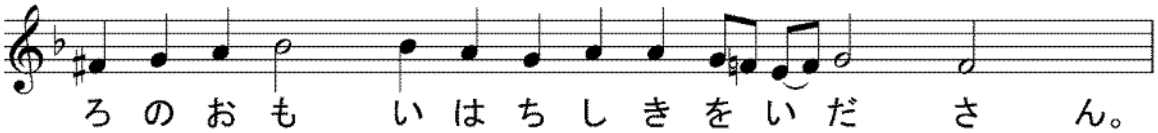


誦經）主よ、我爾に呼ぶ、我の防固よ、我が爲に默す毋れ、



誦經）我が口は睿智を出し、我が心の思は智識を出さん、





思 智 識 出

【 使徒經（アポストロス） 298端 ティモフェイ後書 4章5〜8節

254端 コロサイ書 2章8〜12節

318端 エウレイ書 7章26〜8章2節 】

司祭）睿智（えいち）、

誦經）聖使徒パヴェルがティモフェイに達（たつ）する後書（こうしょ）の讀（よみ）、

司祭）謹（つつし）みて聽（き）くべし、

誦經）子（こ）ティモフェイよ、爾（なんぢ）は一切（いつさい）の事（こと）に儆醒（けいせい）し、苦（くるしみ）を忍（しの）び、福音者（ふくいんしゃ）の工（わざ）を行（おこな）い、爾（なんぢ）の職（しょく）を盡（つく）せ。蓋（けだし）我（われ）已（すで）に祭（まつり）として獻（けん）ぜらる、我（わ）が逝（ゆ）く時（ときいた）至（いた）れり。我（われ）善（よ）き戰（たたかい）を戰（たたか）い、馳（は）すべき程（みち）を盡（つく）し、信（しん）を守（まも）れり。今（いま）より後（のち）、義（ぎ）の冕（かんむり）は我（われ）の爲（ため）に備（そな）えらる、主（しゅ）、義（ぎ）なる審判者（しんぱんしゃ）は、彼（か）の日（ひ）に於（おい）て、之（これ）を我（われ）に賜（たま）わん、第（ただわれ）我のみならず、乃（すなわちおよ）凡（かれ）そ彼（かれ）の顯現（あらわれ）を慕（した）う者（もの）にも賜（たま）わん。

＊＊

（比較用　口語訳）ティモフェイよ、あなたは、何事にも慎み、苦難を忍び、伝道者のわざをなし、自分の務を全うしなさい。わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。

＊＊

誦經）兄弟（けいてい）よ、慎（つつし）め、人（ひと）が、ハリストスに循（したが）わずして、人（ひと）の遺傳（いでん）に循（したが）い、世（よ）の元行（げんこう）に循（したが）う理學（りがく）と空術（くうじゅつ）とを以（もつ）て、爾等（なんぢら）を惑（まど）わさざらん爲（ため）なり。蓋（けだし）神性（しんせい）の充滿（じゅうまん）は悉（ことごと）く實體（じつたい）を以（もつ）てハリストスに居（お）るなり。爾等（なんぢら）も彼（かれ）、即（すなわちおよそ）凡（かれ）の首領權柄（しゅりょうけんぺい）の首（かしら）たる者（もの）に在（あ）りて、充滿（じゅうまん）せられたり。彼（かれ）に在（あ）りて、爾等（なんぢら）は亦手（またて）を以（もつ）てせざる割禮（かつれい）を受（う）けたり、即（すなわち）肉身（にくしん）の罪（つみ）の體（たい）を脱（ぬ）ぐ所（ところ）のハリストスの割禮（かつれい）なり。洗禮（せんれい）を以（もつ）て、爾等（なんぢら）は彼（かれ）と偕（とも）に葬（ほうむ）

られて、亦彼を死より復活せしめし神の力を信ずるを以て、彼と偕に復活せり。

＊＊

（比較用　口語訳）兄弟たちよ、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろもろの霊力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており、そしてあなたがたは、キリストにあって、それに満たされているのである。彼はすべての支配と権威とのかしらであり、あなたがたはまた、彼にあって、手によらない割礼、すなわち、キリストの割礼を受けて、肉のからだを脱ぎ捨てたのである。あなたがたはバプテスマを受けて彼と共に葬られ、同時に、彼を死人の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、彼と共によみがえらされたのである。

＊＊

誦經）兄弟よ、我等の司祭長は實に是くの如き者たるべし、乃聖にして、惡に與らず、垢なく、罪人に遠ざかり、且諸天よりも高き者、彼の司祭長等の如く先づ己の罪、後に民の罪の爲に、日日祭を獻ぐるを要せざる者なり、蓋彼は己を獻げて、一次之を爲せり。蓋律法は荏弱ある人を立てて、司祭長と爲せり、然れども律法の後の誓の言は、世世に完全なる子を立てたり。我が言う所の首要は左の如し、我等に是くの如き司祭長あり、彼は天に於て威嚴の寶座の右に坐せり、且聖所、及び眞の幕、即人に非ずして、主の設けし者の聖務者なり。

＊＊

（比較用　口語訳）兄弟たちよ。聖にして、悪も汚れもなく、罪人とは区別され、かつ、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとってふさわしいかたである。彼は、ほかの大祭司のように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、日々、いけにえをささげる必要はない。なぜなら、自分をささげて、一度だけ、それをされたからである。律法は、弱さを身に負う人間を立てて大祭司とするが、律法の後にきた誓いの御言は、永遠に全うされた御子を立てて、大祭司としたのである。以上述べたことの要点は、このような大祭司がわたしたちのためにおられ、天にあって大能者の御座の右に座し、人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる、ということである。

＊＊

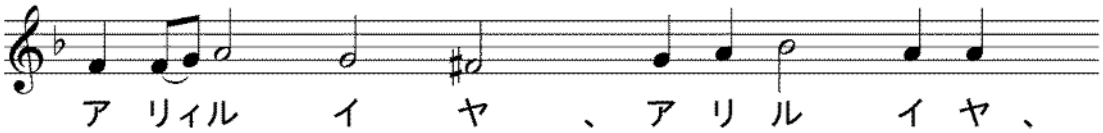
【　アリルイヤ　洗礼祭前の主日　及び割礼祭の　第８調　】

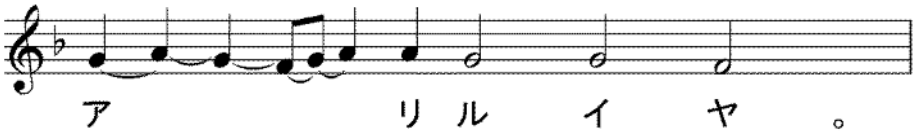
司祭）爾に平安、

誦經）爾の神にも、

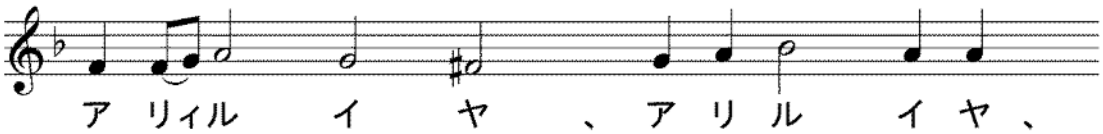
司祭）睿智、

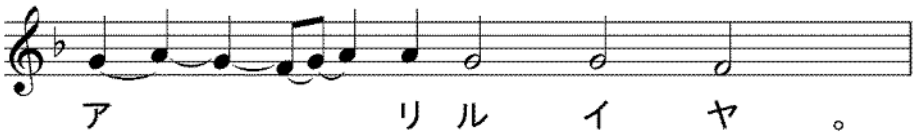
誦經）アリルイヤ、神よ、我等を憐み、我等に福を降せ、



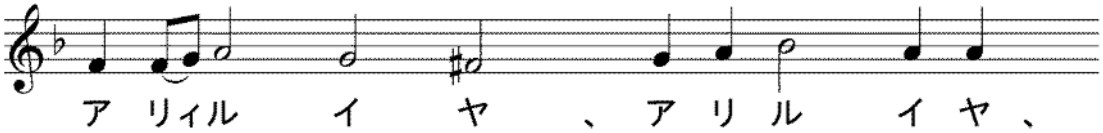


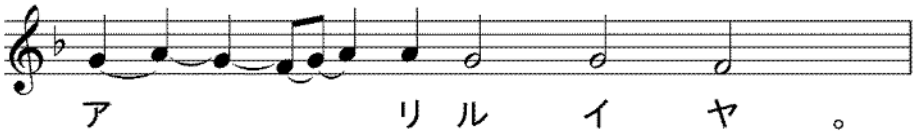
誦經) 爾(なんぢ)の顔(かんばせ)を以て我等(われら)を照(てら)し給(たま)え、





誦經) イズライリの牧者(ぼくしゃ)よ、耳(みみ)を傾(かたぶ)けよ、イオシフを羊(ひつじ)の如(ごと)く導(みちび)く者(もの)よ、己(おのれ)を顯(あらわ)せ、





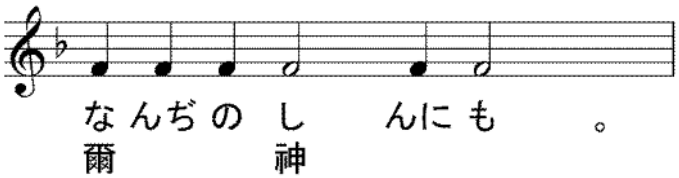
司祭) (黙誦: 人(ひと)を愛(あい)する主宰(しゅさい)よ、我(わ)が心(こころ)に神(かみ)を知(し)る智慧(ちえ)の浄(いさぎよ)き光(ひかり)を輝(かがや)かし、我(わ)が思念(しねん)の目(め)を啓(ひら)きて、爾(なんぢ)が福音(ふくいん)の教(おしえ)を悟(さと)らしめ給(たま)え、我(わ)が衷(うち)に爾(なんぢ)の福(ふく)たる誡(いましめ)を畏(おそ)るる畏(おそれ)をも入(い)れて、我等(われら)が悉(ことごと)くの肉體(にくたい)の慾(よく)を踏(ふ)み、凡(およ)そ爾(なんぢ)の喜(よろこ)ぶ所(ところ)を思(おも)い且(か)つ行(おこな)いて、属神(ぞくしん)の生活(せいかつ)を過(す)ぐるを致(いた)させ給(たま)え、蓋(けだし)ハリストス神(かみ)よ、爾(なんぢ)は我(わ)が靈(たましい)と體(からだ)との光照(こうしょう)なり、我等(われらなんぢ)爾(なんぢ)と爾(なんぢ)の無原(むげん)の父(ちち)と至聖至善(しせいしぜん)にして生命(いのち)を施(ほどこ)す爾(なんぢ)の神(しん)とに光榮(こうえい)を獻(けん)ず、今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に、アミン。)

【 福音經(エヴァンゲリオン) マルコ福音書1端 1章1～8節

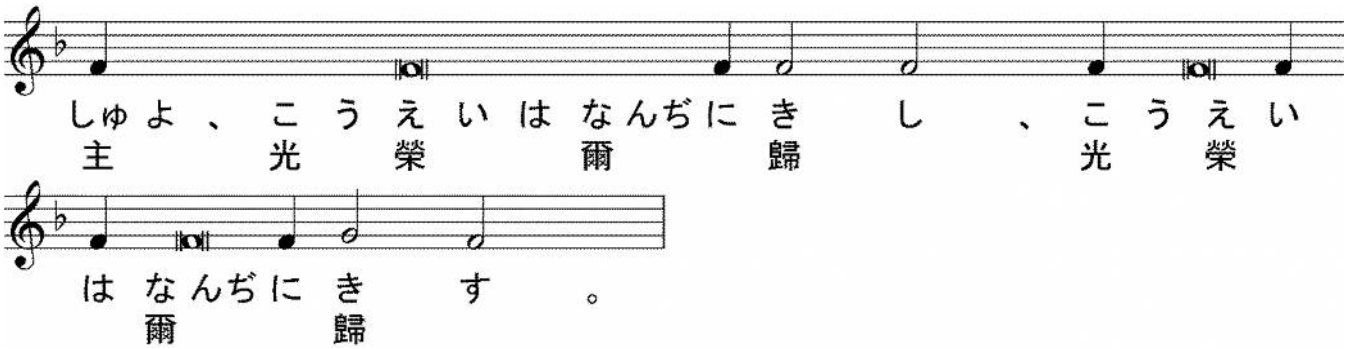
ルカ福音書6端 2章20、21、40～52節

ルカ福音書24端 6章17～23節 】

司祭）睿智、 粛 みて立て聖 福 音 経を聽くべし、 衆 人に平 安、



司祭）マルコ傳の聖 福 音 経の讀、



司祭）謹 みて聽くべし、神の子イイスス ハリストスの福 音の 始 なり。諸預言 者に錄されしが如し、云く、視よ、我我が 使 を 爾 の面 前に 遣 し、 爾 に先だちて、 爾 の道を備えしめん。野に呼ぶ者の聲在りて云う、主の道を備え、其 徑 を直くせよと。イオアン野に在りて洗を授け、罪の 赦 の爲に悔 改の洗 禮を傳えたり。イゥデヤの全地及びイェルサリムの人 人出でて、彼に就き、己 の罪を認めて、皆イォルダン河に於て彼より洗を受けたり。イォアンは駱駝の毛 衣 を衣、腰に皮の帶を束ね、蝗蟲と野蜜とを食えり。彼宣べて曰えり、我の後に更に我より强き者は來る、我 屈みて、其 履の帶を解くにも堪えず。我は水を以て 爾 等に洗を授けたり、彼は聖 神を以て 爾 等に洗を授けん。

＊＊＊

（比較用　口語訳）神の子イエス・キリストの福音のはじめ。預言者イザヤの書に、「見よ、わたしは使をあなたの先につかわし、あなたの道を整えさせるであろう。荒野で呼ばわる者の声がする、『主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ』」と書いてあるように、バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えていた。そこで、ユダヤ全土とエルサレムの全住民とが、彼のもとにぞくぞくと出て行って、自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けた。このヨハネは、らくだの毛ごろもを身にまとい、腰に皮の帯をしめ、いなごと野蜜とを食物としていた。彼は宣べ伝えて言った、「わたしよりも力のあるかたが、あとからおいでになる。わたしはかがんで、そのくつのひもを解く値うちもない。 わたしは水でバプテスマを授けたが、このかたは、聖霊によってバプテスマをお授けになるであろう」。

＊＊＊

司祭）彼の時 牧 者は、凡そ彼等に告げられし如く、聞きし事見し事の爲に、神を讃 榮 讃美

して返れり。八日滿ちて、嬰兒に割禮を行うべき時至りたれば、其名をイイススと名づけたり、即其未だ孕まれざる先に天使の名づけし所なり。子は漸く成長し、精神益強健にして、智慧充ち、神の恩寵は彼に臨めり。其父母歳毎に逾越節筵にイェルサリムに往けり。彼の十二歳になりし時、亦節筵の例に遵いて、イェルサリムに上りしに、日卒りて返る時、童子イイスス イェルサリムに留れり。イオシフと其母とは之を知らずして、彼は同行者の中に在りと意えり、一日程を行きて、彼を親戚知己の間に尋ねしに、遇わざりき、乃彼を尋ねてイェルサリムに返れり。三日の後彼に殿に遇えるに、彼教師の中に坐して、且聽き、且問えり。彼に聞く者皆其智慧と其應對とを奇とせり。父母彼を見て駭けり、其母彼に謂えり、兒よ、何ぞ我等に斯く行いたる、視よ、爾の父と我と憂いて爾を尋ねたり。彼曰えり、奚ぞ我を尋ねたる、豈我は我が父に屬する所に在るべきを知らずや。然れども彼等は其言いし言を曉らざりき。イイスス彼等と偕に下りて、ナザレトに來り、彼等に順い居りき。彼の母は此等の言を悉く其心に藏めたり。イイススは智慧と齢と神及び人人の寵愛とに益進めり。

＊＊

（比較用　口語訳）羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。八日が過ぎ、割礼をほどこす時となったので、受胎のまえに御使が告げたとおり、幼な子をイエスと名づけた。幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがその上にあった。さて、イエスの両親は、過越の祭には毎年エルサレムへ上っていた。イエスが十二歳になった時も、慣例に従って祭のために上京した。ところが、祭が終って帰るとき、少年イエスはエルサレムに居残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。そして道連れの中にいることと思いこんで、一日路を行ってしまい、それから、親族や知人の中を捜しはじめたが、見つからないので、捜しまわりながらエルサレムへ引返した。そして三日の後に、イエスが宮の中で教師たちのまん中にすわって、彼らの話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞く人々はみな、イエスの賢さやその答に驚嘆していた。両親はこれを見て驚き、そして母が彼に言った、「どうしてこんな事をしてくれたのです。ごらんなさい、おとう様もわたしも心配して、あなたを捜していたのです」。するとイエスは言われた、「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」。しかし、両親はその語られた言葉を悟ることができなかった。それからイエスは両親と一緒にナザレに下って行き、彼らにお仕えになった。母はこれらの事をみな心に留めていた。イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。

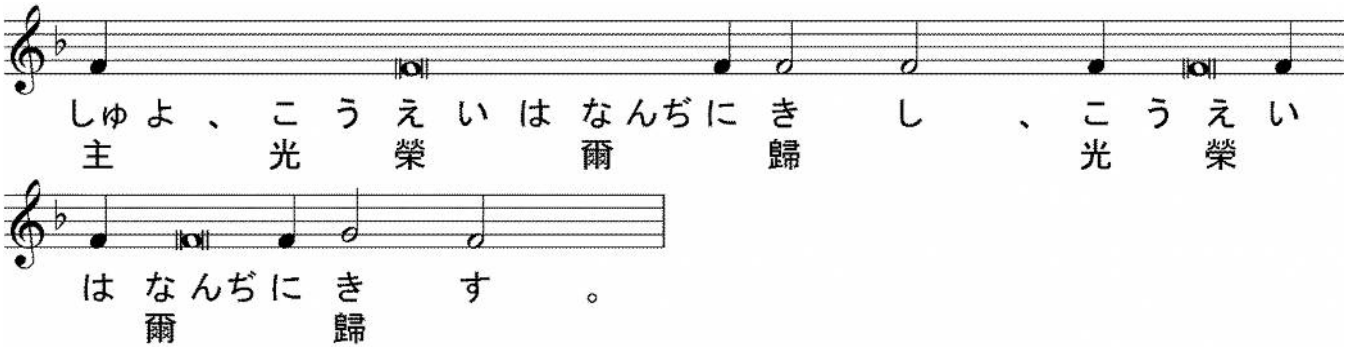
＊＊

司祭）彼の時イイスス平地に立てり、爰に其衆くの門徒、及び衆くの民、イウデヤの四方イェルサリム并にティルとシドンとの海濱よりして、彼に聽かん爲、且己の病の醫されん爲に來りし者、又汚鬼を患うる者ありき、彼等醫されたり。衆民彼に捫らんと欲せり、蓋能彼より出でて、衆を醫せり。彼は目を擧げて、其門徒を視て曰えり、神の貧しき者は福なり、神の國は爾等の有なればなり。今飢うる者は福なり、爾等飽くを得んとすればなり。今泣く者は福なり、爾等笑うを得んとすればなり。人の子の爲に人人爾等を憎み、爾等を絶ち、且詬り、爾等の名を惡しき者として棄つる時は、爾等福なり、其日に喜び樂めよ、天には爾等の賞多ければなり。

＊＊

（比較用　口語訳）イエスは彼らと一緒に山を下って平地に立たれたが、大ぜいの弟子たちや、ユダヤ全土、エルサレム、ツロとシドンの海岸地方などからの大群衆が、教を聞こうとし、また病気をなおしてもらおうとして、そこにきていた。そして汚れた霊に悩まされている者たちも、いやされた。また群衆はイエスにさわろうと努めた。それは力がイエスの内から出て、みんなの者を次々にいやしたからである。そのとき、イエスは目をあげ、弟子たちを見て言われた、「あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ。神の国はあなたがたのものである。あなたがたいま飢えている人たちは、さいわいだ。飽き足りるようになるからである。あなたがたいま泣いている人たちは、さいわいだ。笑うようになるからである。人々があなたがたを憎むとき、また人の子のためにあなたがたを排斥し、ののしり、汚名を着せるときは、あなたがたはさいわいだ。その日には喜びおどれ。見よ、天においてあなたがたの受ける報いは大きいのだから。

＊＊



※聖体礼儀③　へ